

事例で深める!

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイントを
田村先生がアドバイス

千葉県立千葉北高校

教科の評価規準を基に、

科目・単元の評価規準も作成



解説者

文部科学省 初等中等教育局
主任視学官
田村 学 たむら・まなひろ

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。

「7つの北高力」と「資質・能力の3つの柱」をひもづける

田村 貴校の学習評価に関する記事（*1）を拝見しました。評価規準を丁寧に作成されていますね。

森谷 本校では、ブランドデザイン（以下、GD）の中で、育成を目指す資質・能力「7つの北高力」を掲げています。授業でもそれらを育成するため、「資質・能力の3つの柱」とひもづけました（図1）。そして、学習指導要領に示されている教科の目標と「7つの北高力」の評価規準、本校の生徒の実態などを踏まえて各教科の評価規準を作成し、それを基に、各科目と各単元の評価規準も作成しました。

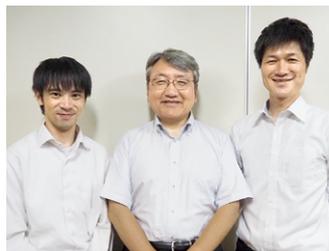
勝田 先生方が安心して学習評価を行えるよう、いずれも本校としての評価の論拠となるGDを踏まえた評価規準とし、生徒や保護者に説明責任が果たせる状態にしました。

田村 「7つの北高力」と「資質・能力の3つの柱」をひもづけた点は、素晴らしいですね。単元の評価規準にまで「7つの北高力」が入っていることで、先生方はそれを意識して授業をするはずですよ。

鈴木 数学科では、例えば「主体的に学習に取り組む態度」は、自己改善ができることをA基準として評価規準を設定し、振り返りなどを授業に取り入れました。

田村 1つの資質・能力を複数の柱にひもづけがちですが、貴校の

千葉県立千葉北高校プロフィール



設立 1975（昭和50）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約320人
2023年度卒業生進路実績 国立公立大は、茨城大、千葉県立保健医療大に3人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、駒澤大、成蹊大、成城大、東京理科大学、東洋大、法政大、明治大などに延べ462人が合格。

左から／鈴木淳和（教務主任、数学科）、勝田幸裕（校長）、森谷一雅（3学年主任、理科 [生物]、教務部）

ように1つの柱にひもづける方が生徒にとっても教師にとっても分かりやすいと思います。

教科間で評価規準を見合い、よい点を学び合う

森谷 現在の課題は、評価がAに偏っている教科や、Bが極端に多い教科があることです。

田村 教科間で評価規準や評価方法を比べてみましょう。例えば、数学科では思考の深まりの違いでAとBの差をつけていますが、理科で

*1 同校の学習評価に関する取り組みは、本誌2022年度2月号の特集で紹介しています。ウェブサイト『VIEW next ONLINE』の「高校版バックナンバー」（<https://view-next.benesse.jp/view/bkn-hs/article14278/>）、または右の2次元コードからアクセスしてください。



図1 教科・科目・単元の評価規準の作成手順

- 育てたい生徒像と、自校で育成を目指す資質・能力を検討し、「7つの北高力」とそのルーブリックを策定。
- 「7つの北高力」と「資質・能力の3つの柱」をひもづける。
- 各教科で3つの観点の評価規準を、下記の資料を基に作成。A（十分満足できる）を規準とし、Aを基にB（おおむね満足できる）を、Bを基にC（努力を要する）を考える。
資料・学習指導要領
 - 文部科学省「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」の別紙5
 - 文部科学省国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（各教科のもの）
 - グランドデザイン、「7つの北高力」の評価規準 ・教科で育成したい資質・能力
- 各教科で、③で作成した教科の評価規準を踏まえて、科目の評価規準を作成。
- 科目のシラバスを作成。その際、科目の評価規準を基に、単元の評価規準を作成。

資質・能力の3つの柱	7つの北高力
知識・技能	徹底力、課題発見力
思考力・判断力・表現力等	思考力、実践力、創造力
学びに向かう力、人間性等	協働力、自己改善力

「7つの北高力」の一つひとつを「資質・能力の3つの柱」のいずれかにひもづけることで、自校で育成を目指す資質・能力を意識した授業づくりを実現。

図2 「数学C」と「生物基礎」の評価規準 思考・判断・表現の例（*2）

「数学C」複素数平面、式と曲線

評価規準	
思考・判断・表現（思考力、実践力、創造力）	A 複素数平面における図形の移動などに関連づけて、複素数の演算や累乗根などの意味を考察でき、軌跡の考え方をを用いて、放物線、楕円、双曲線の方程式を導くことができ、2次曲線と直線の共有点を連立方程式の解と捉え、共有点の個数について考察し、問題解決に活用できる。
	B 複素数平面における図形の移動などに関連づけて、複素数の演算や累乗根などの意味を考察することができ、軌跡の考え方をを用いて、放物線、楕円、双曲線の方程式として考えることができ、2次曲線と直線の共有点を連立方程式の解と捉え、共有点の個数について考えることができる。
	C 複素数平面における図形の移動などに関連づけて、複素数の演算や累乗根などの意味を考察すること、軌跡の考え方をを用いて、放物線、楕円、双曲線の方程式として考えること、2次曲線と直線の共有点を連立方程式の解と捉え、共有点の個数について考えることに、努力を要する。
評価方法	定期考査（思考力を問う問題）

青色の下線は、A・B・Cで文言が異なる箇所。

「生物基礎」生物の特徴

評価規準	
思考・判断・表現（思考力、実践力、創造力）	A 生物の特徴について、問題を見だし、見通しを持って観察、実験などを行い、得られた結果を分析し、多様な生物が持つ共通の特徴を見いだして表現するなど、科学的に探究している。基礎的な知識を材料にグラフを読み取り、考察したり、探究的な問いに答えたりすることができる。
	B 生物の特徴について、観察、実験などを行い、得られた結果を分析することができる。基礎的な知識を材料にグラフを読み取ったり、標準的な問いに答えたりすることができる。
	C 生物の特徴について、観察、実験などを行うことや、得られた結果を分析するための努力を要する。基礎的な知識を材料にグラフを読み取ったり、標準的な問いに答えたりするための努力を要する。
評価方法	<ul style="list-style-type: none"> 定期考査（思考力を問う問題）：配点40点 考査実験レポート：配点5点 A：36点以上、B：14点以上、C：14点未満

緑色の下線は、A・B・Cで文言が異なる箇所。

両科目では、A基準とB基準の差のつけ方が異なっている。「数学C」では思考の深まりで差をつけ、「生物基礎」では評価項目を減らし、問いのレベルを変えている。それが教科・科目の特性によるものかなどを議論することは、評価の精度の向上につながる。

*図1・2とも学校資料を基に編集部で作成。同校では学校のウェブサイトにて全科目のシラバスを公開している。

は評価項目を減らし、問いのレベルを変えています(図2)。教科間でなぜそのような違いが生じているのか、話し合ってみるのです。それによって評価規準をより具体的な文言で表現することができるようになります。評価の精度が上がるはずで、鈴木 評価方法はどのような観点で比較すればよいでしょうか。

田村 どの場合で、誰が、何を、どのように評価しているかという観点で見比べてみましょう。そして、評価規準を適切に見取れる評価方法かどうか、確認します。評価の客観性を担保しようと定期考査などの評価方法を重視しがちですが、評価では妥当性と信頼性が重要です。学習指導要領やGDに基づくことで妥当性は担保され、教科に精通し、生徒をよく知る教師が評価することで信頼性は高まります。

勝田 担当教師が1人の教科では評価をブラッシュアップさせるのは難しかったのですが、教科間で学び合うことはできそうです。これからも、より適切な評価を目指して、試行錯誤していきます。



*2 同校の「数学C」と「生物基礎」のシラバスは、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。
<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。

